

東ドイツ社会主義工業化にまつわる 三つのエピソード

——社会主義の夢と現実：アイゼンヒュッテンシュタットの事例から

白川 欽哉

はじめに

- 1 製鉄所の立地に関する論争と現実
- 2 鉄鋼圧延一貫化の夢の行方
- 3 製鉄コンビナートにおける労働力の調達
- 4 社会主義的労働者都市の夢

おわりに

はじめに

アイゼンヒュッテンシュタット（その前身はフルステンベルクとその周辺村落）は、ブランデンブルク州オーダー・シュプレー郡の工業都市である。ベルリンの東方 105 kmにあるドイツ・ポーランド国境の都市フランクフルト・アン・デア・オーダー（以下、フランクフルト・オーダー）から南方約 30 kmに位置し、その名の通り製鉄都市として知られている。その誕生は、第二次世界大戦後の連合国による分割占領統治、そしてトルーマン・ドクトリン、マーシャルプランを経て進展した冷戦を背景とするものであった。1949 年のドイツ連邦共和国（以下、西ドイツ）とドイツ民主共和国（東ドイツ）の建国は、東西間の経済的分業を寸断し、後者は戦後復興の鍵を握る資本財の調達に苦慮していた⁽¹⁾。また、親ソ政権にとっては社会主義化の良好なスタートを内外に喧伝することも課題となっていた。そうした要請に応えるべく、第一次五ヶ年計画（1951～55 年）の重点項目には、経済復興に必要な鉄鋼業と機械製造業の再建に向けて、圧倒的な不足がみられた高炉とその関連施設（労働者住宅を含む）の新設が盛り込まれた。

この製鉄都市の歴史は、1951 年に新設されたヘルマン・マテルン製鉄所から始まった。その立地をめぐるのは資源型（石炭や鉄鉱石）や交通型（港湾、鉄道等）をめぐる議論があったが、最終的には「谷砂と松林だけの」地に新設されたといわれている。「なぜそのようなところに製鉄所が？」本稿の第一のエピソードでは、その真偽を含めて、この問いについて考察する。

(1) 詳しくは、白川欽哉『東ドイツ工業管理史論』北海道大学出版会、2017、43-47 頁参照。

第二のエピソードでは、上記の製鉄所の技術的展開を追跡する。その歴史には、社会主義建設の成功への期待とともに、現実に直面した様々な政治・経済的問題が凝縮されている。本稿では展開の諸局面から、オーダー河畔の製鉄所に託された夢と現実を概観することにしたい。

第三のエピソード（本稿の「3」と「4」）では、製鉄所の建設と操業のために雇用された様々な出自の人びとについて明らかにしたい。それを踏まえて、新しい社会主義都市に暮らした人びとの生活環境が1950年代から80年代を通じてどのように整備されたのかをトレースしたい。

1 製鉄所の立地に関する論争と現実

(1) 立地論争の経緯

ソ連占領地域・東ドイツの経済復興の最重要課題の一つは鉄鋼素材の調達であった。ソ連のデモンタージュ政策による生産設備の強制撤去や移送⁽²⁾、ドイツ企業のソビエト株式会社への接収と対ソ賠償の履行は復興の大きな障害となった⁽³⁾。また、ライヒの解体や対ポーランド「国境」の成立により、ルールやザール、シュレージエンの鉱山業や製鉄業からの供給が縮小・制限されたことにより東ドイツの置かれた経済状況は一層厳しくなった⁽⁴⁾。とりわけ深刻だったのが高炉の不足で、それは製鋼・圧延工場のみならず、その川下の機械工業全般、造船業、化学工業、建設業にも影響を与えるものであった。対ソ賠償により、バルト海沿岸の造船所、ザクセンおよびテューリンゲンのウラン鉱山、ザクセン、ザクセン・アンハルト、ブランデンブルクの機械製造業や化学工業の生産能力の回復が困難となっていただけに、製鉄業への挺入れは占領期の臨時政府であったドイツ経済委員会の懸案となっていた。

ソ連占領下の懲罰的デモンタージュ政策からソビエト株式会社による間接的賠償政策に移行した1946年夏から年末までは、まだ製鉄所の「新設」について語られてはいなかった。むしろ、東西占領地域間の交渉にもとづく取引を維持しながら、占領地域でソ連側の管理下に置かれた製鋼・圧延工場に賠償を履行させる政策が行われていた⁽⁵⁾。

その転機は、1947年初頭のスターリンと東ドイツ政府との協議後の政策変更にあった。それまで占領地域内の製鉄所や製鋼・圧延工場の再建を拒否してきた在独ソビエト軍政部（以下、SMAD）との協議が47年秋まで重ねられた結果、リーサ製鋼所、ヘニツヒスドルフ製鋼圧延工場、

(2) ソ連占領地域の鉄鋼関連生産能力の四分の三が失われた。Karlsch, Rainer, Industrielle Kerne in Ostdeutschland : Entstehung, Erhalt und Wandel, in : Grüner, Stefan/Mecking, Sabine, *Wirtschaftsräume und Lebenschancen : Wahrnehmung und Steuerung von sozialökonomischem Wandel in Deutschland 1945-2000*, München/Berlin 2017, S.151.

(3) 白川欽哉、前掲書、39-47頁。1936年時点で、のちのソ連占領地域の鉄・非鉄金属冶金の粗生産高は、ドイツ・ライヒ全体の約15.6%であり、西側占領地域のそれは78.7%であった。圧倒的な相違が戦前から存在した（同書、40-41頁の第1-4表参照）。

(4) 同上書、115-121頁。戦後、ソ連占領地域には、自前の資源として、ザクセンのツヴィッカウに近いエルスニッツ（Oelsnitz/Erzgebirge）の僅かな石炭鉱床や、含有の少ないザクセン・アンハルトのカルベ（Calbe）の鉄鉱床があるのみであった。

(5) Karlsch, Rainer, *a.a.O.*, S.152. そのベースとなった東西占領地域間の交易については、白川、前掲書、115-121頁参照。

マクシミリアン製鉄所の近代化、グレーディッツ、ブランデンブルク（市）の製鋼・圧延工場の再建が始められた⁽⁶⁾。また、鉄鋼生産への挺入れは、例えば対ソ賠償の重点の一つであった造船業など、占領地域の機械製造業の立て直しに不可欠であった⁽⁷⁾。冷戦の深化とともに西部からの鉄鋼素材の供給が大幅に削減されるなかで始動した「ニヶ年計画（1949～1950年）」の重点に製鉄業の強化が盛り込まれたことは、東ドイツにおける鉄鋼基盤のアウタルキー的再建⁽⁸⁾を後押しするものだった。

計画前年の1948年に、工業専門書記局長で冶金部門の統括責任者となっていたフリッツ・ゼルプマンが、フライベルク鉱山アカデミー附属製鉄研究所所長のエルンスト・ディーブシュラークに製鉄所新設の企画立案を指示し、招集された鉱山アカデミーの研究者やザクセン州ツヴィッカウ近郊のマクシミリアン製鉄所の技術者たちが、新しい製鉄所の立地について議論を戦わせた⁽⁹⁾。その成果を踏まえて、ゼルプマンはSMADの許可を得るべく、1949年2月にマクデブルク案を提出した。それは、300 km以上に及ぶドイツ最長のミッテルラント運河（ライン川、ヴェーザー川、エルベ川とそれらの支流を結ぶ）を利用して、ルール産鉄鉱石と石炭を調達して製鋼・圧延するというものであった⁽¹⁰⁾。ブランデンブルク州には、ターレ、ブランデンブルク（市）、ヘニツヒスドルフに製鋼・圧延工場があり、従前からの分業関係を活用できる現実的な案であった。この立地案はSMADによって一旦保留とされたが、連合国高等弁務官理事会が、西ドイツからの石炭・鉄鋼の移出を禁止（1950年2月から8月）したことで廃案とせざるを得なかった。その一方で、ディーブシュラークは、交通立地型（臨海）の製鉄所の拠点として港湾都市シュテティーン北部のクラッ

(6) 詳しくは、Unger, Stefan, *Eisen und Stahl für den Sozialismus : Modernisierungs- und Innovationsstrategien der Schwarzmetallurgie in der DDR von 1949 bis 1971*, Berlin 2000, S.175-176.

(7) 造船業の事例については、石井聡『もう一つの経済システム——東ドイツ計画経済下の企業と労働者』北海道大学出版会、2010年の第三章（とくに112-115頁）が詳しい。

(8) ソ連の影響が及んだ東欧各国では独自の鉄鋼基盤を発展させるべき、というスターリンの理論的な確信が影響したという指摘もある。Kleßmann, Christoph (1997), *Zwei deutsche Städte- zwei deutsche Nachkriegsgesellschaften*, in : Beier, Rosmarie, *Aufbau West, Aufbau Ost : Die Planstädte Wolfsburg und Eisenhüttenstadt in der Nachkriegszeit*, Stuttgart 1997, S.28 ; Gerhard Schürer, Eisenhüttenstadt - EKO, in : *Comparativ*, Heft 3, 1999, S.100 ; Karlsch, Rainer, a.a.O., S.152.

(9) 1949年5月にウンターヴェレンボルンのマクシミリアン製鉄所で臨時政府の技術委員会主催で開催された第1回製鉄・製鋼専門家委員会や、その後の高炉建設委員会では、マクデブルク案のほか、エバースヴァルデ案（ベルリンから北へ40 kmに位置する伝統的な金属加工業の町。鉄道や運河への連結も良くオラーニエンブルクとヘニツヒスドルフの製鋼・圧延工場にも近い）、キーツ・キュストリン案（オーダー川沿いの町で鉄道や河川・運河に近い）、ウッカーミュンデ案（バルト海に通じる港町。安価な原燃料に期待）、フランクフルト・オーダー案（ほぼフルステンベルクと同じ条件だが都市化の度合いが大きい）が掲示された。バルト海やオーダー河畔の案が多く、交通立地型製鉄所が好まれたことが看取できる。ただし、イギリスやスウェーデンからの輸入に依存するバルト海沿岸案は、最終的には選択肢にのぼらなくなった。Kinne, Helmut, *Die Geschichte der Stahlindustrie der Deutschen Demokratischen Republik*, Düsseldorf 2002 (CD-ROM版), S.218 ; Ludwig, Andreas, *Eisenhüttenstadt : Wandel einer industriellen Gründungsstadt in fünfzig Jahren*, Potsdam 2000, S.14-17, S.28-29 ; Karlsch, Rainer, a.a.O., S.152 ; Selbmann, Fritz, *Acht Jahre und ein Tag : Bilder aus den Gründungsjahren der DDR*, Berlin 1999, S.245ff.

(10) 占領後の統一ドイツ構想が、東ドイツの高官レベルでも維持されていたことを示す事例である。

ツヴィーク（現 Szczecin Glinki）にあったクラフト製鉄所（Die Eisenwerk Kraft AG）⁽¹¹⁾の拡張を提案していた。しかし、同地がポーランドに帰属する可能性が高まったため廃案となった。

製鉄所の立地の成案がまとまらないなか、1950年初頭にドイツ社会主義統一党（以下、SED）第一書記のヴァルター・ウルブリヒトが、オーダー川西岸のフルステンベルク（フルステンベルク・アン・デア・オーダー：以下、フルステンベルク）⁽¹²⁾とその周辺地域を第一の候補地とし、ソ連のクリヴォイ・ログとドネツク（現ウクライナ）とポーランドのシュレージエン（現シロンスク）からオーダー川や鉄道を使って運ばれる石炭や鉄鉱石をベースとする銑鋼圧延一貫製鉄所が建設されることが宣言された。そしてそれはソ連、ポーランドとの平和と友好の証とされた。

ほぼ同時期の1950年3月、計画省冶金局長であったディートリッヒ・ツァウレックは、計画省副議長のブルーノ・ロイシュナーに、ウルブリヒト案で建設される製鉄所が、将来ドイツ統一実現した際に过剩設備になってしまうリスクを指摘し、ソ連に高炉を新設し、そこから銑鉄を調達したのちに東ドイツで製鋼・圧延するという案を提示した。

それに反論する形で、1950年6月には、工業省管理局「冶金」局長のマキシミリアン・ハインリッヒ・クレーマーが、ウルブリヒトのフルステンベルク案に沿って建設地の選定を行った。クレーマーの計画は、ウルブリヒトや計画省大臣のハインリッヒ・ラウや工業大臣となっていたゼルプマン、中央国家監査委員長のフリッツ・ランゲによって承認され、50年7月のSED第3回党大会で製鉄所建設プロジェクトとして公表された。ただし、この時点ではオーダー川河畔と示されただけで、フルステンベルクを立地とすることは明言されていなかった。脚注9に示したように、オーダー河畔には、ウッカーミュンデ、キーツ・キュストリン、フランクフルト・オーダーが、ウルブリヒトが推すフルステンベルクと並ぶ候補地となっていた。このうちフランクフルト・オーダーは、すでに都市化された町であり交通の要衝となっており有力な立地場所であったが、製鉄所の建設用地としては開発が遅れていたフルステンベルクに分があった。

既定路線が固まるなか、建国後の東ドイツ政府の政策運営を監督していたソビエト管理委員会（前身はSMAD、のちにソビエト高等弁務官理事会）は、臨海製鉄所案やツァウレック案を退け、フルステンベルク周辺を立地場所とすることを提示した。計画経済省は、工業省の案では継続的に長距離輸送コストが発生することに難色を示したが、最終的にはソ連側が危惧する「軍事戦略上

(11) 19世紀末からシュテティーン・クラツェヴィーク（オーダー川西岸のシュトルツェンハーゲンと合併）に搬入されたスウェーデン産鉄鉱石と安価で良質のイギリス産石炭、そしてシュレージエンからオーダー川を使って運ばれた石炭を原料として操業していた高炉を有する製鉄所であった。コークス工場や発電所も隣接していた。Eckert, Karl, *Die Eisen- und Stahlindustrie in den beiden deutschen Staaten*, Stuttgart 1988, S.28.

(12) フルステンベルクは、1250年頃の東方殖民の頃に歴史的源流を持つ。18世紀末までは農業が主たる生業であったが、プロイセン王国による18世紀の恩領地の改革で、耕地が森林（松林、ブナなど）に転換されたという。下記の文献では1750年から1850年の間に、オーダー川の左岸でも大規模な植林事業が進められたことが明瞭になる地図があるので参照されたい。Gansleweit, Klaus-Dieter (Leitung und Bearbeitung), *Eisenhüttenstadt und seine Umgebung : Ergebnisse der heimatkundlichen Bestandsaufnahme im Gebiet zwischen Oder, Neiße und Schaubetal um Eisenhüttenstadt und Neuzelle*, Berlin 1986, S.20-21. 当時のエルベ以东のブランデンブルク北東部の恩領地では、「(木) タール工場、石灰工場、レンガ工場、炭焼き場、木灰窯」や「ガラス工場」での燃料需要の高まりとともに積極的な植林事業が行われていた。飯田恭『農場と森林のプロイセン史——一六～一九世紀の恩領地・恩領林経営』慶應義塾大学出版会、2022年、102-104頁。

の理由」から同地域での製鉄所の新設が決定された⁽¹³⁾。

（2）立地に刻まれた「記憶」

フルステンベルクの周辺村落（とくにシェーンフリース）では、すでに19世紀半ばから褐炭採掘を起点に工業化の胎動が見られた。ガラス工業、製材所、製粉所、日用品生産、食品加工、各種サービス業が生まれ、それらの活動をオーダー・シュプレー運河とオーダー川、そしてベルリンとラウジッツ地方を結ぶ鉄道を利用した物流体制が支えていた。同地におけるさらなる工業的発展の波は、第二次世界大戦を前後する時期にみられた。ナチス政権の軍拡路線に沿って軍需生産を担っていたラインメタル・ボルジッヒの傘下工場（航空機部品）や、ベルリンに本工場を持つアルグス・モーター工場（車両、ボート、航空機エンジン等）の進出がそれである。また豊富な褐炭を利用したマルク発電所などがあったし、また既存の交通・運輸網がブランデンブルク各地の都市の物流を接合していた。工業用水の調達が容易なこの地には、メタノールやホルムアルデヒド（殺虫、防腐、除草薬品等）を製造する化学部門のデグーサ工場の分工場が設立されたり、パーネミュンデで組み立てられていたV2ロケットの部品を製造する地下工場もあったりした⁽¹⁴⁾。このようにフルステンベルク周辺は、短期間のうちに（軍事）工業化された地域だった。後述する将来の住宅建設地を含めると、広大な「谷砂と松林」は確かに存在したが、工場と交通インフラの風景も混在していたとみるのが正しいであろう⁽¹⁵⁾。

上記の軍需工場では、フルステンベルク北部に建築された第3軍管区基幹収容所B（Stalag III B: Stammlager im Wehrkreis III-B）の外国人捕虜たち⁽¹⁶⁾、そしてザクセンハウゼン強制収容所の囚人たちの強制労働によって電力・エネルギー、兵器、武器、弾薬が生産されていた。軍需工場や捕虜収容所は、ドイツの敗戦後にSMADの命令により解体・移送または爆破され、その跡地が製

(13) 臨海型を選択した場合、スウェーデンからウッカーミュンデに安価な鉄鉱石の輸入が可能になった。他方で、ウクライナから海路でウッカーミュンデまで船舶輸送する案もあったが、輸入が西側諸国の監視下に置かれることになるためソ連や東ドイツ政府は支持しなかった。最終的には、西ドイツ国境から250 km離れた場所に建設されることで軍事的不安が取り除かれるという判断から「高コストな」フルステンベルク案が採用された。Roesler, Jörg, »Eisen für den Frieden«, Das Eisenhüttenkombinat Ost in der Wirtschaft der DDR, in : Beier, Rosmarie, *Aufbau West, Aufbau Ost : Die Planstädte Wolfsburg und Eisenhüttenstadt in der Nachkriegszeit*, Stuttgart 1997, S.152. なお、オーダー・ナイセ線沿いの製鉄所は、かりにドイツが再軍備したとしても、すぐに攻撃可能であることも軍事上の理由となるだろう。

(14) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.14-17 ; Gansleweit, Klaus-Diete, *a.a.O.*, S.19 ; 石井聡, 前掲書, 112頁を参照されたい。デグーサの工場では悪名高い「チクロンB」が生産されていた可能性があるといわれている。

(15) フルステンベルクとシェーンフリースの人口をみても、19世紀末から第二次世界大戦直前までの工業化に伴って急増していたことがわかる。1891年に前者は4,021人、後者は841人、1933年にはそれぞれ7,054人、1,550人に増加していた。Gansleweit, Klaus-Dieter, *a.a.O.*, S.205の表参照。

(16) 捕虜収容所には、欧州（フランス、ソ連、ユーゴスラビア、オランダ、イタリア、ベルギー、ポーランド、ルーマニア、英国、チェコ）ならびにアメリカ合衆国出身の囚人がのべ4万4000人拘留されていた。捕虜として最も待遇の悪かったのがソ連兵であったという。飢えや病気で亡くなった捕虜は、当初はフルステンベルクの墓地に埋葬されていたが、1941年夏以降は未利用の畑に埋められるようになったという。Schütrumpf, Jörn, »Wo einst nur Sand und Kiefern waren...« Vergangenheitsbewältigung im Eisenhüttenkombinat, in : Beier, Rosmarie, *Aufbau West, Aufbau Ost : Die Planstädte Wolfsburg und Eisenhüttenstadt in der Nachkriegszeit*, Stuttgart 1997, S.143.

鉄所建設の場となった⁽¹⁷⁾。また、ソ連兵の戦没者や収容所で亡くなった捕虜たちが埋葬されていた二ヶ所の共同墓地⁽¹⁸⁾は戦後 SMAD の命令で掘り起こされ、約 4,000 人の亡骸が元ソ連兵捕虜たちの手で、のちに製鉄都市の住宅地の一部となる追悼広場に移され、墓地跡は製鉄所の敷地として使用された⁽¹⁹⁾。

フルステンベルクにおける戦時中の記憶と戦後のソ連によるデモンタージュ等の記憶は、「反ファシズムの社会主義都市が、友好国ソ連とポーランドの支援で新設された」というイメージを演出するには SED にとって好ましくない存在であった。東ドイツの公式の歴史叙述のなかで触れられなかった二つの項目、すなわちナチズムの歴史との関係性とソ連からの直接・間接の圧力や干渉は、平和・友好と社会主義を掲げる SED の正統性への疑念を生みかねなかったからであろう。こうして過去の記憶は一旦封印され、「変革と革新性」が語り継がれた。

2 銑鋼圧延一貫化の夢の行方

立地論争が終了し、製鉄所の建設現場の本格的な整地が行われたのは 1950 年 8 月であった。前述の軍需工場、収容所、共同墓地の跡地周辺の松林が伐採されるとともに、工場の解体後に残ったコンクリート製の道路や構内軌道、河岸や運河の港などが改修された。それらに並行して同年 12 月までに、工場跡地の瓦礫が重労働の末に片付けられ高炉の土台が築かれ、1951 年 1 月 1 日午前 8 時に、重工業省大臣となっていたフリッツ・ゼルプマンが定礎式を行った。新生東ドイツで初めて高炉を有する製鉄所の建設が開始された⁽²⁰⁾。第 1 号高炉に火が入られたのは 1951 年 9 月 19 日で、初出銑は 10 月 13 日であった。その後、第 2 号高炉から第 4 号高炉は 1952 年中に完成した。その際、高炉と併せて鉄鋼工場、選鉱工場、焼結設備、構内鉄道、その他のインフラを整えることが目標とされた。目指していたのは銑鋼圧延一貫化を実現することであった。

この高炉建設のスピードとは裏腹に、銑鉄の生産計画の達成率は、1951 年が 58.9%、52 年が 88.0% と振るわなかった。初期の達成率の低さは、設備の不良や不具合に対応できるエンジニアや作業員の不足、作業員全般の熟練度の低さや労働規律の悪さ、作業部門間の連携の悪さ、労災の発

(17) 「1945 年初頭からの数ヶ月にわたりオーダー川の攻防の最前線となった 90 ヘクタールの土地では、将来の工場用地として、地雷搜索隊が弾薬、地雷などの爆発物の除去を行った」。Roesler, Jörg, *a.a.O.*, S.150.

(18) フルステンベルクの西に隣接するシェーンフリースと、捕虜収容所の北側ポーリッツ湖畔の墓地に埋葬されていた。Schütrumpf, Jörn, *a.a.O.*, S.141.

(19) なぜ、そして誰が追悼碑に亡骸を移送したかについては、当時公言されていなかったが、高炉建設が始まった際、共同墓地跡が見つかったことをきっかけに調査が入り、製鉄所の記録に残された。ソ連政府の命令により、ドイツ軍の捕虜として戦後に生き残った人々が、「犯罪人」（捕虜になること自体が罪というスターリンの思想）として共同墓地から町の追悼碑への亡骸の移送を強制されたという記録である。町の住民たちはそれを目の当たりにしていたが口外は忌避された。より詳しくは、Schütrumpf, Jörn, *a.a.O.*, S.141-144 参照。なお、ソ連に構築されたグラーク（収容所管理総局）の強制労働システムにならって、ソ連占領期の東ドイツでもソ連兵が囚人として強制労働させられていた。村井淳「ソ連における強制労働と建設——囚人と捕虜は、どのように労働利用されたか」『関西外国語大学研究論集』第 91 号、2010 年 3 月、117-135 頁参照。

(20) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.31.

生など、生産に必要な条件が物的にも人的にも整っていなかったためである⁽²¹⁾。完成していた第2号高炉の稼働が53年までずれ込んだのも、そうした事情が絡んでいた。SED・政府は、第一次五ヶ年計画とソ連への賠償不履行に繋がりがかねないと判断し、ソ連側に技術者の派遣を要請したり、東ドイツの技術者や労働者の養成に向けて大学や専門学校の整備、ソ連への留学を組織したりした⁽²²⁾。

そうした試行錯誤のなか、1953年にヘルマン・マテルン製鉄所はJ.W. スターリン製鉄コンビナートに改称された。同年11月には第5号炉が、54年8月には第6号炉の建設が終わった。これにより54年の銑鉄生産高は73万トン、55年には約93万トンに増大し、建設当初の状況からは改善がみられたが、日産500トン級の高炉6基の生産高としては十分なものとはいえなかった。なお、53年時点ではあるが東ドイツの銑鉄生産全体の約50%（60年には60%）を占めるに至り、戦後の危機的状況からの脱出という限りでは、新設された製鉄所の意義は少なくなかったといえよう⁽²³⁾。

最初の2年間よりも高炉建設のスピードが鈍化した背景には、政府の投資政策の変更があった。1953年6月17日の労働者蜂起やその直前の「新コース」の発表を境に、重工業部門への投資の傾斜配分にブレーキがかけられ、国民の消費生活に軸を置いた政策が展開されることになった。この問題が製鉄コンビナートに与えた影響は大きく、予定されていた第7号炉と第8号炉の建設が中止となった⁽²⁴⁾。1955年までに建設される予定だった当時最新のLD転炉や、原料節約に向けて検討されたシーメンス・マルタン製鋼工場の導入や、一貫化を狙った鋼板圧延工場の計画も中止された⁽²⁵⁾。

一貫化への次のステップは、製鉄コンビナートの敷地で冷間圧延工場の建設が開始された1963年であった。この機会に、製鉄コンビナートから「スターリン」の冠を外し、東部製鉄コンビナートに改名して新たなスタートを切ろうとしたが、投資政策の重点が大きく変更（石油化学、電機・電子、機械）されて資金不足となったために、完成するまでに5年を要した⁽²⁶⁾。翌69年に東部製鉄コンビナートは、薄鋼板と帯鋼を製造する帯鋼コンビナート“ヘルマン・マテルン”の傘下に統合され、東ドイツ全土にあるターレ製鉄所、フィーノウ圧延工場、ブルク圧延工場、オラーニエンブルク冷間圧延工場、バート・ザルツンゲン冷間圧延工場、オーベルンハウ板金圧延工場と協業す

(21) Roesler, Jörg, *a.a.O.*, S.153-154; Kinne, Helmut, *a.a.O.*, S.219-220. この結果について、ソ連側の技術者からは厳しい評価が下されていた。

(22) Kinne, Helmut, *a.a.O.*, S.218-219. Döring, Karl (EKOの元総支配人) もそうした留学生の一人である。Döring, Karl, *EKO Stahl für die DDR -Stahl für die Welt : Generaldirektor und Stahlmanager*, Berlin 2015 (eISBN 978-3-95841-513-3) 電子書籍版。

(23) 残りの40～50%は、テューリンゲンのマクシミリアン製鉄所と、ザクセン・アンハルトのカルベに新設された西部製鉄所（1951年11月に操業開始、59年にカルベ低シャフト炉製鉄所に名称変更、70年に高コストと生産性の低さを理由に閉鎖）で製鉄された。数値の検証のために、Unger, Stefan, *a.a.O.*, S.422の表も参照。製鉄コンビナートの生産や輸出入の実績の検証は、今後の課題としたい。

(24) Kinne, Helmut, *a.a.O.*, S.220.

(25) Schürer, Gerhard, *a.a.O.*, S.101; Roesler, Jörg, *a.a.O.*, S.155; 北村喜義『旧東独の企業システムと鉄鋼業——体制の崩壊と再建の政治経済過程』御茶の水書房、2000年、125-126頁。

(26) 白川欽哉、前掲書、192-193頁。

る基幹経営体（本工場）となった。その後、同コンビナートでは、1973年に新しい焼結工場が新設された以外は、大きな改良はなされなかった。

新しい動きは、SED・政府が西側諸国（日本を含む）との関係を小規模ながらも構築し始めた1981年から84年にかけてLD転炉（オーストリアのVöest/Alpine社製）が建設されたことである⁽²⁷⁾。しかし、東ドイツに欠けていたのは熱間圧延工場であった。熱間圧延製品は長らくソ連からの輸入に頼っていたが、1980年代になってからは転炉で造られた銑鋼の鑄造半製品を、西ドイツの熱間圧延工場に輸送し、加工後に再び帯鋼コンビナートの本工場や傘下工場に戻して冷間圧延する方法が採られていた。「鋼のツーリズム」と呼ばれたこの東西ドイツ間交易に依存し続けるには、相応の外貨支出が必要であったため、SED政治局内でその存続をめぐる議論がなされた。国家計画委員会議長であったゲアハルト・シューラーが、状況の打開に向けて1986年に自前の熱間圧延設備を建設することを提案した。ソ連から圧延設備を輸入し、制御機器や電子部品、コイルボックスなどの特殊な部品は西ドイツから輸入するという内容の計画案に対し、政治局員で党中央委員会計画経済担当のギュンター・ミッタークが反発し、87年末には計画中止が決定された⁽²⁸⁾。最初の製鉄所新設以来、長年追求されてきた銑鋼圧延一貫化は、ついぞ果たされることはなかった。

3 製鉄コンビナートにおける労働力の調達

(1) 建設労働者の調達

1950年代のフルステンベルクでは、高炉の新設準備に向けて建設労働者の募集が始まっていた。SED郡支部は、まずは周辺地域から約200人を集め敷地の整備を行わせた。建設現場を取り仕切っていたのは、東部建設ユニオン（Bau-Union Ost）であった。集まった労働者の多くは、フルステンベルクの周辺の農村で日雇いや時間給の賃労働をしていた。そのなかには、東方からの被追放民（東方難民）⁽²⁹⁾が少なくなかった。1950年10月には1,160人、1951年2月には2,400人、同年6月には8,200人に急増し、1年後の52年6月には1万3000人の建設労働者が従事していたという⁽³⁰⁾。

当時最も必要とされていたのは専門的知識を持つ労働者であった。1950年11月には、全体の

(27) 1984年11月6日に東ドイツのエーリッヒ・ホーネッカー総書記とオーストリアのフレッド・シノヴァッツ首相との間で協定が結ばれ、導入が実現した。Schürer, Gerhard, *a.a.O.*, S.101.

(28) ミッタークの論拠は、次のようなものだった。ソ連の熱間圧延設備は世界水準に達していない、パートナー企業として想定されている西ドイツのSchloemann-Siemagはキリスト教民主同盟と結びついている、設備を制御する32ビットコンピューターはココム規制に抵触する可能性がある、ベルギーの焼鈍炉（焼きなまし炉）は大量のエネルギーを消費する、イタリア製の設備よりも、日本製に注目したほうが良い、というものだった。Schürer, Gerhard, *a.a.O.*, S.102.

(29) 当時のソ連占領地域内被追放民の全体像については、川喜田敦子『東欧からのドイツ人の「追放」——二〇世紀の住民移動の歴史のなかで』白水社、2019年、71-93頁参照。足立芳宏『東ドイツ農村の社会史——「社会主義」経験の歴史化のために』京都大学学術出版会、2011年、第1章と第2章は、メクレンブルク・フォア・ポメルンに逃れてきた被追放民・難民について詳細な分析がなされている。白川欽哉、前掲書、30-34頁も参照されたい。

(30) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.32.

20.6%が職業訓練を受けた建築職人だったが、さらなる増加が期待されていた⁽³¹⁾。1951年夏までに、エルツ山脈にあるゾーサのダム建設に従事していた労働者を含め、多くの求職者が集まってきたが、飲酒問題や無断欠勤など労働モラルの弛緩の事例が散見された⁽³²⁾。それに対応するため、職業訓練や政党組織や労働組合への加入をうながし、不熟練者の職業的かつ人格的教育が実践された。建設現場には多くの若者も集まり、模範的な作業班を成していた⁽³³⁾。職業教育を受けながら働くチャンスや、徐々に浸透しつつあった同一労働同一賃金の原則、さらには住宅が得られる可能性なども彼らを惹きつけていた⁽³⁴⁾。

いま一つ、当時の状況で重要だったのは女性労働者の存在である。ソ連占領地域・東ドイツの登録求職者数の推移をみると、敗戦から1950年まで求職者の数は、1947年17万1000人（うち女性が48.5%）、48年25万人（54.2%）、49年36万3000人（65.4%）、50年47万3000人（63.2%）と増加が顕著であり、なかでも女性の求職者が多かった⁽³⁵⁾。全国の趨勢が示すように、フルステンベルクでの製鉄所建設や製鉄工場の求人も、女性たちの関心を惹いたはずである。1952年には当地の製鉄所関連の女性労働者は2,300人で、そのうち1,900人は建設労働者であった。建設部門という、従前の男の世界への参入は対立を生んでもいた。1952年に製鉄所内で結成された女性委員会においては、男女同権を掲げ男性たちの偏見の克服に努めたという。また、フルタイム労働の女性は、仕事と育児のバランスが差し迫った課題となっていた。後述する都市建設において、他の都市よりも良質の保育・幼児教育施設が住宅地に提供されることになった背景である⁽³⁶⁾。

（2）高炉労働者について

新設された製鉄所で最も不足していたのは高炉作業に従事する熟練労働者や技術者であった。1951年から52年にかけて雇用された作業員は、フルステンベルクの住民のほか、北のフランクフルト・オーダーから南のグーベンの間にある161の都市や農村から通勤する者もいたが、建設労働出身者が多かった⁽³⁷⁾。農業出身者は、製鉄所での就業リズムに慣れることから始めなければなら

(31) Corny, Jochen, Die Herausbildung sozialistischer Kollektive und Arbeiterpersönlichkeiten beim Aufbau des Eisenhüttenkombinats Ost (EKO) 1950–1952, in : Akademie der Wissenschaften der DDR : Zentralinstitut für Geschichte (Hrsg.), *Jahrbuch für Geschichte* 17, 1977, S.460の表を参照。

(32) 部門は違うが、造船業の事例は、石井聡、前掲書、166頁、175–176頁参照。なお同書では労働モラルの低下の原因には、労働者の過剰雇用、必要な原材料が準備されず仕事が滞っているなど「自然と規律が乱れてしまうような条件」が存在したことを指摘している。併せて、河合信晴『政治がつむぎだす日常——東ドイツの余暇と「ふつうの人々」』現代書館、2015年、58–61頁参照。

(33) 注31のCorny氏の表によれば、18歳以上の男性が全体（1,269人）の48%、女性が23%であった。事務職員は7.4%だったが、その多くは女性であったと考えられる。

(34) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.32–33.

(35) Frerich, Johannes/Frey, Martin, *Handbuch der Geschichte der Sozialpolitik in Deutschland : Band2 : Sozialpolitik in der Deutschen Demokratischen Republik, zweite Auflage*, München/Wien 1996, S.172.

(36) Kießmann, Christoph, *Die Arbeiter in »Arbeiterstaat« DDR : Deutsche Traditionen, sowjetisches Modell, westdeutsches Magnetfeld (1945 bis 1971)*, Bonn 2007, S.531.

(37) Corny, Jochen, *a.a.O.*, S.461. コルニー氏がまとめた表によれば、フランクフルト・オーダーやグーベンなど、比較的大きな都市からの労働力の移動が確認できる。

なかった⁽³⁸⁾。

もう少し詳しくみよう。製鉄所の初期の従業員は、1951年には約1,000人、52年には約3,000人、53年には6,600人に増加した⁽³⁹⁾。1952年の年齢構成は、20代以下の者が43%強、30代を含めると66%強で若者の雇用が特徴的であった。従業員のうち13%は1950～51年に他の製鉄所や鉄鋼所で職業教育を受けた者、46%は製鉄所以外で冶金業に携わったことがある者、建設業に従事していた者、電気工、通信機器製造、鉄道員、トラック運転手などからなるグループであった。17%は商人、運送人、農民、ガラス職人、パン・菓子職人、靴屋、紡績工など、製鉄とは関係のないグループであった。24%は農業に従事していたことがあるが製鉄所に採用される前は無職だった者である⁽⁴⁰⁾。約6割の従業員が、製鉄業や機械工業との関わりを持ってはいたが、専門労働者の不足は否めなかった。

時間は前後するが、1951年に高炉第1号が操業する直前に、製鉄所は専門労働者の育成に乗り出していた⁽⁴¹⁾。50年秋には約300人の建設部門の専門熟練工がフュルステンベルクに集められ、そのうち50人は未来の高炉作業の専門工に、60人は製鋼部門の専門工になるための職業教育を受けた。また1951年1月には、ザクセン州のリーサの鉄鋼所、ブランデンブルク（市）の鉄鋼所で9ヶ月間の職業再教育を受け、51年3月には136人の事務職員と155人の若い労働者から成る従業員がテューリンゲン・ウンターヴェレンボルンのマクシミリアン製鉄所（東ドイツ地域で唯一の高炉を有していた製鉄所）で37名の高炉作業員による職業指導を受けた⁽⁴²⁾。このほか、33名はリーサの鉄鋼所、19名はヘニッヒスドルフの製鋼・圧延所、10名はデーレンのシーメンス・マルタン製鋼所、56名がグレーディツの鑄造工場で学び、製鉄所の鉄鋼圧延一貫化に備えた⁽⁴³⁾。

(3) 1953年労働者蜂起

東ドイツ鉄鋼業の新たな旅立ちとなった1950年代は、石井聡氏が指摘するように、労働者間の競争と労働生産性の向上がSED・政府によって組織された時代であった。製鉄コンビナートでも、出来高賃金とその基礎となる「技術的に根拠づけられた労働ノルマ」との組み合わせで労働者を物的に刺激する施策が講じられた。また、製鉄所建設にあたっては、建設労働者の競争が「スターリン・キャンペーン」として鼓舞され、それは各種の報奨によって若者たちを惹きつけた。さらに、「社会主義的人間を陶冶する」という名目で、ソ連でソボートニクと呼ばれた無償の土曜労働奉仕も製鉄の町で実践された。しかし、低目に設定され、容易に達成可能なノルマは生産性を実質的に

(38) 河合氏によれば、1950年代においては、就業時間は厳密に守られず、仮病で出勤しない「病気休日」をとる行動も見られたという。原材料が入荷せず生産そのものが中断しがちで、労働規律が守られにくかった。河合信晴、前掲書、60-61頁。

(39) Corny, Jochen, *a.a.O.*, S.428-429.

(40) Corny, Jochen, *a.a.O.*, S.462の表を参照。

(41) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.32-33; Kleßmann, Christoph, *a.a.O.*, S.529.

(42) Corny, Jochen, *a.a.O.*, S.429-430. なお、ソ連から派遣されたエンジニアは重要なパートナーであったが、短期的な支援しか得られなかった。ゆえに製鉄所独自の職業教育や再教育を進めざるを得なかった。Kleßmann, Christoph, *a.a.O.*, S.529.

(43) Corny, Jochen, *a.a.O.*, S.453.

引き上げることはできなかった。また、なかば精神論とともれる各種の動員は期待した成果をあげることとはできず、むしろ形骸化していった。

こうした状況下で、とくに「社会主義的人間の創造」という観点から重視されたのが「模範労働者運動」であった⁽⁴⁴⁾。フルステンベルクにおいて、ポーランド政府と連携して進められた方策は「三交代制」の導入であった。各シフト労働者を刺激する（煽る）べく、「ワルシャワ・テンポ」と呼ばれたスピードで建築の速さが競われた。製鉄所の建設労働者たちは「ソ連のスタハーノフのように働きたくない」と、当初この方法を拒否していたが、1951年に出来高賃金制が導入されると、多くの労働者が生産性向上運動に参加するようになったという。しかし、煉瓦工のみならず、機関車運転士、機関車製造工場、トラック運転者などの出来高賃金制にもとづく動員は長続きしなかった。決して「科学的」ではなかったノルマを引き上げて、生産性向上を図ろうとした政府の発表が引き金となって、1953年6月17日にベルリンのスターリン・アレーの建設労働者のストライキを皮切りに全国各地に飛び火した労働者蜂起はこの町にも波及した。

奇しくもスターリンの死から約2ヶ月後の5月7日に、製鉄所の町はスターリンシュタット⁽⁴⁵⁾と命名されていた。同市での蜂起について、高炉労働者が建設労働者のデモから工場を守った、といった逸話も残されているが、それは労働者間の職階・地位の格差を背景とするものだった。むしろ建設労働者の行動は、東ドイツの諸都市で発生したデモと同様の性格を持つものだった。蜂起はソ連軍の介入や秘密警察による批判分子狩りによって鎮圧され、表向きの秩序は生まれたが、抵抗の力は収まっていなかった。1956年6月8日から10日には、火力発電所建設の労働者が、根拠が明確に示されない賃金支給や住宅環境への不満からストライキを敢行した⁽⁴⁶⁾。労働条件の改善は必至となっていた。

労働者蜂起の直前に党・政府が発表した「新コース」は、第一次五ヶ年計画に盛り込まれていた重工業優先の投資政策の中断を意味し、それは製鉄コンビナートに直結する事柄であった。「鋼鉄からパンを」というスローガンは、「鋼鉄の代わりにパンを」に変わったことで、1955年までの完成を目論んでいたシーメンス・マルタン炉と圧延工場の建設は頓挫した。1954年の投資資金は前年の三分の一に削減された。先述の生産設備刷新の中断は10年後の経済改革の始動とともにようやく解除され、冷間圧延工場が稼働したのは、それから15年後の1969年のことであった。その際、発生した労働力需要に呼応して、スターリンシュタット（61年からはアイゼンヒュッテンシュタット）の人口や製鉄所労働者数は増加して70年代を迎えたが、80年代に至るまでの世界的規模

(44) こうした模範労働者運動の端緒は、すでに1948年の「ヘンネッケ運動」にもみられた。ソ連のスタハーノフ運動、などに範をとったといわれている。河合信晴、前掲書、58-62頁。この運動を含む、1948年から1950年代前半の労働生産性向上運動の実態、それと1953年6月蜂起との関連性に迫るものとして、星乃治彦『社会主義と民衆——初期社会主義の歴史的経験』大月書店、1998年、98-115頁；石井聡、前掲書、76-87頁を参照されたい。

(45) 1950年夏にフルステンベルクは「新設された東部製鉄コンビナートの居住都市（Wohnstadt des neu errichteten Eisenhüttenkombinats Ost）」と呼ばれるようになったが、1953年2月1日には新しく命名される都市に合併される特別市（Stadtkreis）となった。その特別市を含む製鉄都市の名称は、1953年3月14日のカール・マルクス没後70周年を記念してKarl-Marx-Stadtとすることも検討されたが、同年3月5日に死亡したスターリンの名前を付すことになり5月7日にスターリンシュタットと命名された。なお、その際ザクセンの古都ケムニッツがKarl-Marx-Stadtに改名された。

(46) Kleßmann, Christoph (2007), *a.a.O.*, S.527.

の資源危機，産業構造の転換，鉄鋼需要の減少と競争激化の波は，東ドイツの製鉄都市にも影を落とし，他産業への労働移動による住民数の減少が見られるようになる。

4 社会主義的労働者都市の夢

(1) 設計・建設思想と国家

ふたたび，1950年代のフルステンベルク・スターリンシュタットに戻ることにしよう。先述のように製鉄所の建設とその稼働には大量の労働力の調達が必要であり，すでにその初期段階から増大する労働者のための住宅建築が懸案となっていた。

1950年9月から51年8月まで，製鉄所の入り口付近に労働者向けのバラック式（木造長屋）の集合住宅が建てられた。1954年時点では，34棟のバラック式長屋が241名のEKO従業員と791名の他の会社の従業員のために提供されていたという⁽⁴⁷⁾。その後も，短期間にそうした長屋が建築され，1952年には3,000人の建設労働者のための木造長屋が建築された。

急場しのぎのバラック式長屋が建築されるのと並行して，1952年から56年にはキオスクや軽食スタンドが製鉄所の敷地やバラックの傍らに設けられた。一時的に国营商店の店舗や特別販売所が設けられ，日々の購買場所の不足を補っていた。住宅地には，シャワー小屋が設置されたり，理容店，簡易映画館も建てられたりした。レストラン「フリーデンスシュタール（平和の鋼）」^{はがね}は，住民たちの休日の憩いの場であった。1953年に結成された協同組合「Komsun」も住民たちの日々の購買に役買っていた。バラック住居群が最終的に新興住宅に置き換えられたのは1965年のことであった。

こうした急場しのぎの措置がなされるなか，製鉄コンビナートの建設に並行して住宅政策が進められていた。1950年7月の第3回SED党大会で，ウルブリヒトが「ドイツで最初の社会主義都市」を築くことを宣言したことで，一気に計画に弾みがついた。同党大会で採択された「都市計画の16原則」（1950年7月27日）⁽⁴⁸⁾により，新しい都市の構成要素として，(1)都市の中心部に政治・行政に必要な重要施設を集め，それを取り囲む住宅群には住民の健康な生活に不可欠な「光，空気，太陽」を保障すること，(2)建物の美観を保ちつつ社会の進歩・革新的伝統を表現すること，(3)住民の社会的・文化的欲求を充足すること，などが求められた。

とくに建築様式においては，「国民的・伝統的建築観（Nationale Bautradition）」と呼ばれた「ナショナルな形式と民主的な内実」が重視された。「ナショナルな形式」は，18世紀から19世紀への転換期の新古典主義であり，それは18世紀の貴族的なバロックやロココ様式への批判から生まれたものであった。ギリシア・ローマ時代の巨大で威厳のある，しかし合理的で機能美溢れる建築

(47) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.42.

(48) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.109-111に「16原則」が資料として記載されている。その理解に向けて，エングラー，ヴォルフガング（岩崎稔・山本裕子訳）『東ドイツのひとびと——失われた国の地誌学』未来社，2010年，41-42頁。（原著：Engler, Wolfgang, *Die Ostdeutschen: Kunde von einem verlorenen Land*, Berlin 1999, S.37-39）も参照。この原則の作成に関わった建築家や建設担当の党幹部・官僚たちは，1950年4月から5月までのソ連の視察旅行を通じて，ソ連における都市観やその実態，建設思想などの影響を強く受けたといわれる。Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.42-43.

や建物のファサードや壁面の装飾は、スターリン政権下で 1920～30 年代に普及した社会主義古典主義を体現する町づくりに体現されたものであった。「民主的な内実」については、ブルジョアジーを代表する広場や教会を中心とする都市の原理から、労働者国家を代表する威厳のある構築物と政治や文化の交流の広場を中心とする原理に置き換えることで、人民の力とそれを支える国家の力を体現することが意図されていた⁽⁴⁹⁾。

都市設計にあたっては、工業省（生産重視、ソ連型）と復興省（文化重視、独自型）の主導権争いがあったが、最終的に復興省のイニシアチブで進められることになり、1951 年 4 月に同省が推薦するクルト・W・ロイヒト⁽⁵⁰⁾がプロジェクトリーダーに選ばれた⁽⁵¹⁾。とはいえ住宅建設資金は五ヶ年計画前の 1950 年に工業省が準備していたため、この時点でロイヒトは設計に関わっていなかった。五ヶ年計画では、10 ブロックで 460 世帯分の集合住宅を建築する際に、1 住居当たりの建築コストは 1 万マルクという予算制約が課されていたため、工業省は“チューペンバウ (Typenbau)”と呼ばれたセメントブロックを用いた工法でコスト節約を図った。二部屋で、天井までの高さが 2.7 m というタイプの住宅であり、「狭くて、天井が低い」と批判の声があがっていた。しかし、1951 年 2 月には工事が始まり、51 年 9 月から 52 年 1 月までには住宅群が完成した。この住宅群は製鉄所南の正門前に建てられたが、1951 年秋にグローテヴォール首相が、52 年 1 月にはウルブリヒト第一書記が視察に訪れた際に、それらを「飾り気のない箱たち」と酷評したことが知られている。かれらは住民の声を聴取したうえで、政府として建築計画の変更を指示した⁽⁵²⁾。

この混乱のなか、先のロイヒトが作成した設計案が 1952 年 5 月 12 日の閣僚評議会で承認された。ロイヒトは多くのスタッフを率いて新しい都市の設計と建設計画を作成したが、そこには SED の政治路線が反映された。1952 年 7 月の第 2 回 SED 党大会で「社会主義建設」が明示された際に、製鉄都市の建設はその模範的なプロジェクトの一つとされた。ロイヒトの構想においては、都市の芸術的コンセプトとなる「国民的・伝統的建築観」をどのように表現するかということが課題となっていた。最終的には建築はされなかったが、ロイヒトの 1952 年の設計図を見る限り、製鉄所の正門前にスターリン像を立てたり、都市のシンボルになる櫓や塔、コロネード（柱廊）、巨大な文化施設や劇場を建築したりすることが構想されていた。「社会主義社会の増大する富」をそ

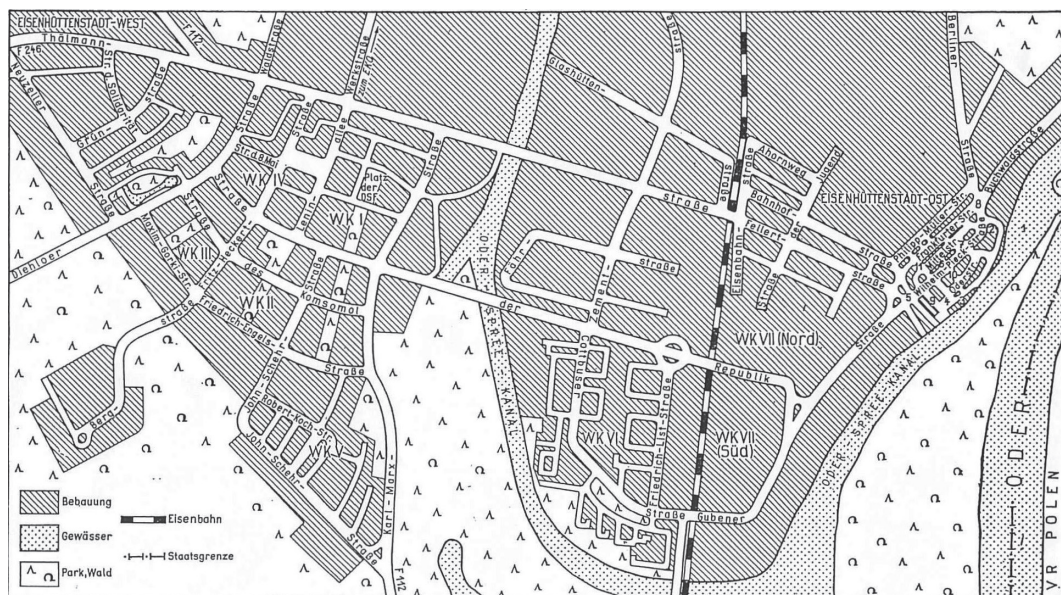
(49) 上記の「都市計画の 16 原則」にもとづく建築物の典型と言われるのが、ヘルマン・ヘンゼルマンの設計にもとづくベルリンの「スターリン・アレー」（1961 年 12 月 21 日からカール・マルクス・アレー）と、その両サイドの建物群である。エングラ、ヴォルフガング、前掲書、40-51 頁（Engler, Wolfgang, *a.a.O.*, S.39-43）では、スターリン・アレーの特徴が詳細に描写されている。

(50) Kurt Walter Leucht（1913 年 6 月 8 日フォークトラント郡エレフェルト生まれ、2001 年ドレスデン没）：1927 年から 33 年にブラウエンの芸術学校に通ったのちグラウシャウの建築学校で教育を受けた。1933 年には国家社会主義労働者党に入党し、空軍に配属されたが、36 年にはエルンスト・ザーゲビール（ナチス期の著名な建築家）の事務所建築技師として働き、軍の土木建築に携わった。戦後は、ドレスデンの都市計画に携わり、復興省からの任命で各地の都市設計に寄与した。「16 原則」の草案にも関わった若き建築家であった。エングラ、ヴォルフガング、前掲書、51 頁（Engler, Wolfgang, *a.a.O.*, S.44）。

(51) ロイヒトに限らず、多くの建築家がこの都市の設計に携わっていた。建築に関する議論の詳細については、Krauner-Romani, Elisabeth, *Eisenhüttenstadt und die Idealstadt des 20. Jahrhunderts*, Weimar 2000 の緻密な研究が有益である。

(52) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.46-47.

第1図 アイゼンヒュッテンシュタット（旧スターリンシュタット）の概略地図



凡例（訳）：Bebauung：建築整備された地区 Gewässer：河川、運河 Park, Wald：公園、森林
Eisenbahn：鉄道 Staatsgrenze：対ポーランド国境

- 注1) WKはWohnkomplexの略。本文では居住区と訳した。地図上には、WK I～WK VIIまでである。WK VIIはさらにNord（北区）とSüd（南区）に分かれている。それぞれの居住区の特徴については、第2図と第1表ならびに本文を参照されたい。
- 注2) 図中の運河と川について：東側のオーダー川が途中から西側に分岐し、ベルリン方面に流れていくシュプレー川と合流し、オーダー・シュプレー運河が形成されている。鉄道は、ベルリン、フランフルト・オーダー、アイゼンヒュッテンシュタット、グーベン間の鉄道がある。
- 注3) 図の左側、オーダー川と運河の分岐したあたりにある街区が、フルステンベルク旧市街である。地図上では見えづらいが、1. 旧フルステンベルク湖、2. 城跡、3. キーツ（かつての漁民の集落）、4. 聖ニコライ教会、5. 赤の広場、6. マルクス・エンゲルス広場、7. リンデン（樅ノ木）広場、8. 平和広場、9. ヴァル（壁）通り、10. レーヴェン（ライオン）広場、11. 学校前広場がプロットされている。

出典：Gansleweit, Klaus-Dieter (Leitung und Bearbeitung), *Eisenhüttenstadt und seine Umgebung : Ergebnisse der heimatkundlichen Bestandsaufnahme im Gebiet zwischen Oder, Neiße und Schaubetal um Eisenhüttenstadt und Neuzelle*, Berlin 1986, S.113. 注は筆者が記載。この地図は、1980年時点の状況を反映したものである。

の前に広がる都市市民の生活と結びつけようとする意図が見て取れる⁽⁵³⁾。ロイヒトの集合住宅についての設計思想がどのような形で具体化したかについては、次の項目で確認することしよう。

(2) 居住区の特徴の変遷

第1図（本稿32頁）と第1表（33頁）には、1951年から1980年代半ばまで建設が続いた七つの居住区を示すとともに、その特色を簡単にまとめた。また、第2図（34頁）はロイヒトの設計思想が反映された第I～第IV居住区に焦点を当てた地図である。それらの助けを借りながら「製鉄

(53) Kleßmann, Christoph (2007), *a.a.O.*, S.527.

第1表 第I居住区から第VII居住区の建築期間とその特徴

地区	建築期間	特 徴	居住区を東西南北に囲むアレー・通り（シュトラセ）
第I居住区	1951-53年	最初に開発された地区。高さの異なる建物が混在するのは、政府による批判前の住宅と改善後の新設住宅の違いに由来する。この新興住宅地で最初の保育園・幼稚園と基幹学校が建てられたが、それは他の居住区の基準となる。ソ連兵の追悼広場と広い中庭広場が目を惹く。文化財保護地区。	製鉄所正門を背に正面左側の居住区。カール・マルクス通り、レーニン・アレー（現リンデン・アレー）、リプブリック通り、テールマン通り（現ベースコヴァー通り）に東西南北囲まれた一角。
第II居住区	1953-55年	美しく装飾された建物群、広い緑地帯や並木道、石造りのアーケード商店街など、豊かな住環境が整備された地区。文化財保護地区。	カール・マルクス通り、フリッツ・ヘッケルト通り、フリードリッヒ・エンゲルス通り、リプブリック通りに囲まれた一角。
第III居住区	1955-56年	第II居住区と同様に、美しく装飾された建物群、広い緑地帯や並木道、各種教育施設、大型クリーニング店も建てられ、豊かな住環境が整備された地区。文化財保護地区。	フリッツ・ヘッケルト通り、ディーローアー丘から続く大通り、マキシム・ゴリキ通り、リプブリック通りに囲まれた一角。
第IV居住区	1959-67年	都心部に位置する。建物のクオリティが、第II、第III居住区よりも劣る。他方で、ユニークな発想の建物や景観づくりが行われたりもした。国民的・伝統的建築観を残しつつ、新しい合理的住宅建設が進んだ時期である。	レーニン・アレー、ディーローアー通り、リプブリック通り、テールマン通りに囲まれた一角。
第V居住区	1959-64年	第IV居住区と同時期に造成されたが、製鉄コンビナートの新しい労働力需要に応えるべく、比較的短期間にブラッテンバウ工法で建築された。美観は失われたが、台所、トイレ、浴室が完備された。	カール・マルクス通り、フリードリッヒ・エンゲルス通りからディーローアー丘に沿って南東に向かうヨーン・シェア通り（現ポスト通り）に囲まれた居住空間。
第VI居住区	1965-78年	すべてブラッテンバウ工法で建築。辛うじて緑地や広場、商業施設等が造成された。	シュプレー・オーダー運河の東側で、鉄道線路の東側。北側はリプブリック通りに面している。
第VII居住区	1982-87年	ブラッテンバウ工法で、第VI居住区よりもさらに低コストで建設。9階建以上の高層建築も見られた。フルステンベルク旧市街地を一部浸食する形で造成された。	2020年に解体（Märkische Onlinezeitung, 20.April 2020の記事より）

出典：Howest, Frank, *Eisenhüttenstadt -Auf und Umbau einer geplanten Stadt*, Dissertation an der Ruhr-Universität Bochum, Fakultät für Geowissenschaften, Geographisches Institut, Eisenhüttenstadt 2006, S.64-72 の記述と第1図の通り＝Strasseの名称（現在の名前も確認）から作成。

都市」の町づくりや集合住宅の建築様式を見ることにしよう。

第I居住区では、建築当初は先述のコスト節約的な集合住宅が建てられたが、政府からの批判のうちに新築された住宅が混在していた。平屋根の3階建て・4階建ての集合住宅が立ち並び、改修・新築の集合住宅のほうが広さも高さもあることが外観からも明瞭であった。この地区の代表的な場所は、中通りにあたるゲオルギー・ディミトロフ通り（現アイヒェンドルフ通り）の北側にあるドイツ・ソ連友好広場（第1図・第2図参照）であった。その南側の集合住宅は、ロイヒトが好む「国民的・伝統的建築観」の外観を有していた。集合住宅中央の1階の通り口から中庭に通り抜けたあとに広がるマルヒレフスキー・リング（第2図参照）には噴水と多数の彫像が設置され、緑地と広い空間が独特の雰囲気醸し出していた。このほか、幼稚園I、小学校I、洗濯屋、国営の商業施設が建てられ、それらはその後建設された居住区の不可欠の構成要素となった。

第II居住区では、ロイヒトの社会主義的住居のユートピアと「国民的・伝統的建築観」が融合さ

第2図 アイゼンヒュッテンシュタットの第I居住区(WK I)～第IV居住区(WK IV)



出典：Howest, Frank, *Eisenhüttenstadt -Auf und Umbau einer geplanten Stadt*, Dissertation an der Ruhr-Universität Bochum, Fakultät für Geowissenschaften, Geographisches Institut, Eisenhüttenstadt 2006, S.45. 図中の二つの Straße の新旧の名称が異なる。Beeskower Straße は Thälmann-Straße, Lindenalle は Lenin-Alle, Saarlouiser Straße は Straße des Komsomol であった。図中にある他の通りの名前は, Diehloer Straße, Fritz-Heckert Straße, Straße der Republik, Karl-Marx-Straße, Friedrich-Engels Straße である。

れた空間が作られたといわれている。集合住宅の外壁や正面には「菓子職人様式」と呼ばれる細かな装飾が施された⁽⁵⁴⁾。集合住宅群に囲まれた緑地帯(南北に 300 m, 幅 40 m～50 m)や並木道(エーリッヒ・ヴァイネルト・アレーとパヴロフ・アレー), 芸術的な装飾が施された噴水, 子供たちの遊び場やプール, 街路に建てられた数々の銅像が, この地区の特徴をなした。代表的な建物の

(54) 建物のファサードの装飾が, ウェディングケーキやジンジャーブレッドハウスのように見えることから, この名称が使われたといわれる。1920 年代のソ連にもみられた建築様式でスターリン様式と揶揄されることもあった。

一つは、コムソモール通り（現ザールルイアー通り）とヨーン・シェアー通り（現ポスト通り）が交差する辺りの美しく装飾された石造りのアーケードのある商業施設と1階が商店や飲食店の4階建て集合住宅であった。徒歩で買い物ができる場所として市民に親しまれていた。また、小学校、幼稚園の建物⁽⁵⁵⁾も「国民的・伝統的建築観」のコンセプトで造られたものであった。さらに、フリードリッヒ・エンゲルス通り沿いの集合住宅には、ロイヒトの設計が活かされた住居群が立ち並んでいる。その通りを挟んで第Ⅱ居住区の南側の丘陵の麓には、美しい建築の市民病院が立っている（第2図参照）⁽⁵⁶⁾。

こうしたポジティブな進展も束の間、1953年4月に、突然のロイヒトの解任が伝えられ都市建設に暗雲が立ち込めた。表向きはロイヒトたちの「国民的・伝統的建築観」への疑義などイデオロギー対立が語られたが、経済的な事情がむしろ決定的だった。五ヶ年計画で予定されていた投資資金では、集合住宅の建築分は用意できるものの、ロイヒトたちが構想した都市空間全体の工事にはあまりにも資金が不足していた。1953年6月の「新コース」による傾斜配分政策の是正（消費財優先）や労働者蜂起による政府への不満の声を背景に、日常生活や文化的な欲求を満たしてくれる個々の施設の建設は早期に行われたが、総合的な街づくりは遅れ始めた。労働者蜂起前直前の5月7日、この都市はスターリンシュタットと命名され、さらなる成長のためには労働者を惹きつけ、社会主義の躍進を印象づけるためには魅力ある居住空間が必要だった⁽⁵⁷⁾。

ロイヒト解任後もスターリンシュタットの設計は重要な課題として受け止められていた。市の要請で都市計画に参画していたロイヒトは、1954年11月に再登用され、55年夏まで都市の設計案が作成された⁽⁵⁸⁾。第Ⅲ居住区では、ロイヒトたちの「国民的・伝統的建築観」にもとづく集合住宅が辛うじて反映された。この地区を代表する場所はハインリッヒ・ハイネ・アレーであった。車両交通が制限されたこの空間は、南北に360 m東西80 mの広さで、そこには様々な樹木とともに、ハイネの胸像、大きな噴水、スーパーマーケット、保育園などが共存する場所であった。居住区の人びとのみならず、市民の憩いの場の一つとなっていた（第2図参照）。第Ⅲ居住区の通りを挟んでさらに南側のディーローアー丘の麓には、大型クリーニング店、幼稚園Ⅲ、総合学校Ⅲ、学童保育施設などが立っていた。同地区の北側の集合住宅群が四方を囲む形で大きな公園が造成されてもいた。なお、この第Ⅲ居住区の造成途上には、スターリンシュタットの目抜き通りであったレーニン・アレー沿いにフリードリッヒ・ヴォルフ劇場が建設された。また、政党と大衆組織の家（現在の市庁舎）がレプブリック通りとレーニン・アレーが交差する場所に建設され、党・政府、そして先の「16原則」が求めている「都市の中心」がようやく作られ始めた。さらに市民の憩いの場となったレストラン「アクティヴィスト」が第Ⅱ居住区に隣接するカール・マルクス通り沿いに建築された。

(55) なお、第Ⅱ居住区の幼稚園Ⅱは、1992～93年に設立された東ドイツ日常文化資料センターに利用されている。Gansleweit, Klaus-Dieter, *a.a.O.*, S.125-126. 2021年からは、ベースコウの芸術資料館と統合して、ユートピアと日常博物館となった。

(56) Ebenda.

(57) Ludwig, Andreas, *a.a.O.*, S.51.

(58) 事実、その構想は第Ⅱ、第Ⅲ居住区の建築に活かされた。Schütrumpf, Jörn, Kurt W. Leucht, Planer von StalinStadt, der »ersten sozialistischen Stadt Deutschlands«, in : *Beier, Rosmarie, a.a.O.*, S.85.

第Ⅲ居住区の建築が順調に進むなか、またしても都市計画に水を差す事態が生じた。1954年11月にソ連においてフルシチョフ第一書記が、建設コストの削減に向けて「象徴性の高い構築物から経済性の高い建物への移行」を宣言したことが計画変更の契機となった。1955年2月1日のSED中央委員会では、上記の宣言が「建設業の最重要課題」に反映され、「より短期間に、より良質の、より安い」建設を奨励することが決定した。その方針に従って建築された第Ⅳ居住区では、2階建て・3階建てと他の地区よりも低い住宅が建築されたり、標準的な内部構造や量産化された同型の素材を用いた4階建て（プラッテンバウ工法の原型）集合住宅が建てられたりした。またレーニン・アレーの第Ⅰ居住区側には、それまでの趣のある景観にそぐわない9階建ての高層住宅が3棟建てられた⁽⁵⁹⁾。製鉄所正門からレーニン・アレーを南に進んだ先にある「都市の中心」には国際的なホテル（スウェーデン様式）と百貨店（当初は大型衣料品店）が建てられ、以前よりも近代的で機能的な顔を見せるようになった。しかし、その「中心」を成すはずだった共和国広場と劇場、祝祭大ホール・小ホール施設の建設は中止に追い込まれた。

第Ⅳ居住区には、当初の予定とは異なる旧シェーンフリースの東側の地域も加えられた。そこには小川の傍の切妻屋根の住宅が建築された。それによって、かつての農村地帯のジードルング（集落）のイメージが再現されたといわれている⁽⁶⁰⁾。しかし、そのすぐ後方には9階建ての高層住宅が建てられ、建築思想的な統一性は見られなかった。第Ⅳ居住区は、「国民的・伝統的建築観」からの離脱と工業的建築への過渡期を表していたといえよう。

第Ⅴ居住区は第Ⅱ居住区の南東方向に隣接する場所で、1959年から64年にかけてプラッテンバウ住宅（バルコニー付き）が建築された（前掲第1図）。新経済システムによる経済改革を宣言したことで知られる1963年1月のSED第6回大会で決定された冷間圧延工場の建設による労働者の増加を見越してなされた造成であった。この居住区には、他の地区と同様に幼稚園、小学校、各種生活関連施設が建築された。また多くの彫刻作品が街角に彩りを添えていた。しかし集合住宅は、工場で造られたコンクリートパネルで組み立てられたために「個性」を失ったが、台所とトイレ・浴室が完備された機能的な居住空間は都市住民の関心を惹いた⁽⁶¹⁾。

以上、第Ⅰ居住区から第Ⅴ居住区までは、オーダー・シュプレー運河の西側を南北に走るカール・マルクス通りのさらに西側に位置していたが、その後に造成された第Ⅵ居住区と第Ⅶ居住区は、運河の東側にある旧市街を含めたフルステンベルク側にあった（前掲第1図）。第Ⅵ居住区では、エレベーターのない5階建てのバタフライルーフのプラッテンバウ住宅群が、計画時点（1961～62年）の居住者数1万人を大きく超える1万8000人の住民のために建設された。予想を超える需要に押されて、1978年には住宅が主要道路の交差点付近に所狭しと建築された。その後フルステンベルク旧市街の南側に造成された第Ⅶ居住区（1982～87年）では住宅がひしめき合

(59) Topfstedt, Thomas, Abschied von der Utopie. Zur städtischen Entwicklung Eisenhüttenstadts seit Mitte der fünfziger Jahre, in : Beier, Rosmarie, *a.a.O.*, S.189 ; Howest, Frank, *Eisenhüttenstadt -Auf und Umbau einer geplanten Stadt*, Dissertation an der Ruhr-Universität Bochum, Fakultät für Geowissenschaften, Geographisches Institut, Eisenhüttenstadt 2006, S.55-58.

(60) Gansleweit, Klaus-Dieter, *a.a.O.*, S.125-126. 同書末尾（ページ番号なし）に資料として掲載されている6枚目の白黒写真が、工業都市と農村の集落が交じり合う一畝を写しだしている。

(61) Howest, Frank, *a.a.O.*, S.64-66.

うように建てられた。第Ⅶ居住区ではコスト節約を最優先する住宅建築が進められた⁽⁶²⁾。折しも1980年代は、東ドイツ経済が苦境に立たされていた時代であったが、住宅建設は国策として東ドイツ各地で強力に推進されていた（その象徴が、ベルリン中心部から東部のマルツァーン地区）。コンクリートパネルの量産化がそれを下支えした。

製鉄所の労働者たちが、遊び心と古き良き時代を思わせる「国民的・伝統的建築観」で建築された集合住宅と緑と光あふれる居住空間に住むことができるようになった1950年代のアイゼンヒュッテンシュタットは、おそらく人びとの夢を運ぶ町だったに違いない。しかし、機能性や経済性重視の建築観が主流となるにつれ、社会主義都市の初期の夢は消えていくこととなった。

おわりに

最後に、三つのエピソードから得られた知見と、新たな課題を提示して本稿を締めくくりにしたい。

第一のエピソードでは、東ドイツで最初の高炉建設が行われた背景を考察するとともに、統一前にベールに包まれていた製鉄所の立地論を紹介した。先述の通り、戦後の東ドイツには圧倒的に高炉が不足し、それが同国の重工業基盤の脆弱性となっていた。資源に乏しい東ドイツには、西部ドイツとの分業関係を再建するか、ソ連との共存を図るか以外の選択肢はなかった。製鉄所の立地の選択をめぐるのは、単純に戦勝国ソ連の押し付けではなく、経済合理性をめぐる専門家たちの論争があったこと、しかし政治判断が最終的には優先されたことが浮き彫りとなった。

いま一つ隠蔽されていた事実、製鉄所がまったくの原野ではなく、19世紀半ば以来工業化がゆっくりと進行し、第二次世界大戦を前後して軍需工業の一翼を担うことになった場所に建設されたということであった。また、戦後に軍需工場や関連施設がソ連により解体・撤去され、戦時中の捕虜収容所が戦後ソ連の収容所として使われ、のちに製鉄所の労働者の一時的な住宅として使用されたことも東ドイツの公式の歴史で語られることはなかった。この戦時中から敗戦直後の記憶の隠蔽は、新生社会主義ドイツがナチス時代の過去と距離を置き、同盟国ソ連や隣国ポーランドとの友好と平和を演出するためのものであったと考えられる。本稿では、近年の研究が解明した史実の一部を紹介することを試みたが、ベールの向こうには無数の隠された記憶が眠っているはずである。製鉄の町に生きてきた人びとの記憶を蒐集した郷土史・社会史研究からさらに学んでいきたい。

第二のエピソードでは、1950年代に新設された製鉄所に託された夢が、すでに初期時点から頓挫する可能性があったことを示した。東ドイツの国民経済を支える鉄鋼基盤を創出するという壮大な計画は、それまでの西部ドイツ鉄鋼業への依存から脱却すること、そして当面の鉄鋼需要を満たすためにソ連からの支援を得ることが大前提となっていた。しかし、見てきたように高炉建設も、設備の稼働後も最初から波乱含みのスタートであった。

東ドイツの鉄鋼業の展開に大きな影響を与えたのは、1953年労働者蜂起を境に大きく変更され

(62) Howest, Frank, *a.a.O.*, S.66-72.

たSED・政府の投資政策であった。投資資金が減額され、計画されていた高炉の建設は50年代半ばに中止された。以後も鉄鋼圧延一貫化は追求されたが、国際競争力のある鉄鋼素材の供給体制は実現しなかった。この躓きは、必然的に東ドイツの対ソ依存が高まることを意味した。また徐々に西ドイツを含む西側諸国からの輸入にも頼ることになった。1970年代から80年代にかけて、東ドイツ鉄鋼業の主要パートナーは相変わらずソ連であったが、とくに東西ドイツ間の関係改善（1972年）以降は、西側諸国（とくに西ドイツ）との取引が増加するようになった。冷戦下で製鉄所建設が始まった頃に東ドイツ鉄鋼業にかけられた大いなる期待は失われ、SED・政府は対症療法的な対応に終始した。最終的には国際競争力のある鉄鋼業を創出することができないまま統一を迎えたのである。

第三のエピソード（本稿の「3」と「4」）では、最初に1950年代に製鉄所に雇用された建設労働者や高炉作業労働者を出自、年齢階層、性別、熟練度などで分類するとともに、職業・技術者教育の導入、労働生産性の向上運動とその帰結などを論点に、それらの特徴を整理した。それにより若い労働者たちが、バラック住宅から通いながら、あるいは周辺の都市や農村から通勤しながら製鉄所で働いていた風景が見えてきた。模範労働者運動に象徴された出来高賃金による生産性向上への誘導は、開始当初は効果を有していた。しかし1953年労働者蜂起に見られたように、計画経済下の行き過ぎた誘導は労働者のストライキやデモによる条件闘争を超えて政治改革や体制批判の声を生んでしまった。それが武力鎮圧されたのちには、消費優先の労働者懐柔策が採られたが、それは少なからず社会主義都市の住宅建設にも影響を与えることとなった。

製鉄所建設の準備段階には、場当たり的なバラック住宅の建築がみられたが、製鉄所の操業が開始して以降は、社会主義のシンボルとしての「計画都市」の建設が国家主導で推進された。1951年から1953年までに建築された第Ⅰ居住区には安普請の建物も存在したが、政府の批判を受けてロイヒトが関わるようになってからは、「国民的・伝統的建築観」に沿った古風で美しく、工夫された空間利用が施された住宅群が立ち並ぶようになった。その設計思想は第Ⅱ居住区、第Ⅲ居住区に受け継がれた。おそらく当時この街に暮らした人びとは、製鉄所の発展と自分たちの生活水準の向上との一体性を感じていたことであろう。

第Ⅳ居住区と第Ⅴ居住区が建築された1950年代末から60年代は、製鉄所の規模拡大に向けて、より多くの労働者を受け入れる住宅が必要となった。しかし、「より短期間で、快適で、安価な住宅を」というSEDの方針は、美観と生活のゆとりを重視するロイヒト的な都市建設の発想を徐々に後退させ、70年代から80年代にかけてプラッテンバウと高層化の時代へと移行していった。それは新社会への期待や情熱を伴った、いわば情動的な社会主義建設の時代が終焉し、東ドイツが経済合理性に重心を置いた社会主義に舵を切ったことの表われだったのかも知れない。

（しらかわ・きんや 釧路公立大学経済学部教授）